



## 事例1 京都市立堀川高校

### DATA

- 学 科：普通科第Ⅰ類・第Ⅱ類  
人間探究科 自然探究科
- 創 立：1908年
- 生徒数：744人  
(男子410人・女子334人)
- 進路状況(2007年度実績)  
大学162人 短大5人  
専門学校4人 就職3人  
その他73人

# 二兎を追いながら 自立する18歳を育む

2002年春、前年度6人だった国公立大学の現役合格者数を一気に106人に増やしたことで一躍脚光を浴び、「堀川の奇跡」と称された京都市立堀川高等学校。以降、京都大学の現役合格者数で全国公立高校のトップクラスの座を維持するなど、「公立復権」の象徴として知られている。

しかし、同校では大学合格だけを目標しているわけではない。「自立する18歳を育む」というスローガンを掲げ、自ら学ぶ姿勢を養い、大学あるいはその後の長い人生を生き抜く力を育てることを教育目標に据えている。

1985年に同校に赴任。1995年から3年間の京都市教育委員会勤務を経て「新生堀川」誕生の前年に教頭として戻り、2003年から校長職を務めるなど、一貫して同校と関わる荒瀬克己校長に、進学校における進路指導・キャリア教育のあり方と具体的な実践について伺った。

### 「探究基礎」という科目

堀川高校の代名詞といわれるのが「探究基礎」(人間探究科・自然探究科)という科目だ。後述する「総合探究」(普通科)と合わせて探究科目と呼ばれている。これは、グループや個人単位で自由にテーマを設定し、ディバ



荒瀬克己校長

トやプレゼンテーションなど様々な仕掛けを通じて、課題の発見や解決に取り組む授業だ。基本的には週2コマで行われるが、実際には放課後や休日、長期休暇などを使い、寝食を忘れて研究に没頭する生徒も多い。1クラスに対して最低でも2人の教員が担当するほか、大学院生によるティーチングアシスタントもつく。学術顧問として山折哲雄氏、茂木健一郎氏ほか錚々たる顔ぶれも並ぶ。研究成果はポスター発表や個人論文の形で発表されるのだが、これがすごい。

「赤土への吸着を利用したリン溶出抑制法の開発」  
「合成着色料による植物プランクトンの繁殖の抑制」  
など、大学の卒業論文と見紛うテーマが揃うのだ。

そうした高度な論文はどのように生まれるのだろうか。探究基礎はホップ(1年前期)、ステップ(1年後期)、ジャンプ(2年前期)という3段階を経て完結する。

まずホップでは論文の書き方や情報機器の使い方など研究に必要な基礎的なスキルを学ぶ。40人のクラスを8グループに分け、ディベート大会を経てグループ論文を作成。完成した論文は英訳され、ディベート同様、ク

ラス内での選考を経て全体会で発表される。

ステップは文理あわせて10のゼミに分かれての活動となる。ゼミ選択は9月に実施される2年生の研究発表やゼミの担当教員によるプレゼンテーションを参考に行う。文系ゼミでは少人数のグループで論文を作成、理系ゼミではデータ分析の基礎、実験やシミュレーションの技能を身につけるなどして、共に個人研究に備える。

ジャンプは探究基礎の総決算。興味・関心のあるテーマを設定し個人研究を進める。成果はポスター形式にまとめられ探究基礎研究発表会で発表。生徒同士が互いに評価しあい、最後に個人論文を作成して終了する。

探究科目は単なる自由研究ではない。そこには、大学に合格する力だけではなく、受けとる力、考える力、判断する力、表現する力を磨きながら、自ら学ぶ姿勢を養ってほしいという意図が込められている。それは、新生堀川高校誕生の背景をひもとくと理解しやすい。

### 新生堀川高校誕生の背景

1999年に人間探究科・自然探究科が新設される以前の堀川高校は、京都のほかの公立高校同様、進学実績では著名な私立高校に遠く及ばない、けれど穏やかな生徒が集うごく普通ののんびりとした学校であった。

しかし、進学ニーズが高まる時代状況にあって公立高校全体が地盤沈下するなか、市民からは「公立では大学に合格できないではないか」という不満が高まっていた。当時、同校の一教諭であった荒瀬校長も、同僚が子息を私学に通わせている現状に疑問を抱いていた。そして、自分の子供にも自信をもって勧めることができる魅力ある学校に変えたいと手探りで学校改革を進めていた。そんな折、行政においても改革の機運が高まり、府立高校に統

図表1 堀川高校の学科構成

普通科第Ⅰ類 <1学年1クラス>	基礎基本を重視し学力を充実するコース。2年次以降、文系・理系・一般系を選択。幅広く教養を深める。
普通科第Ⅱ類 <1学年1クラス>	学習内容を拡充・高度化し、学力を伸長するコース。2年次以降、人文探究コース・理数探究コースを選択。
人間探究科 <自然探究科と合わせ1学年4クラス>	人文系統の学習を深め、人間の文化や社会・行動などについて探究する能力と態度を養う専門学科。
自然探究科	理数系統の学習を深め、自然の現象や原理・法則などについて探究する能力と態度を養う専門学科。



ポスター形式の研究発表会では生徒同士が批評しあう

く形で、堀川高校をパイロット校とした市立高校改革が動き出す。改革は巨費を投じた近代的な校舎の新築を始め多岐にわたるが、目玉は大学での高度な教育と高校とを橋渡しする「普通科系の新学科」を設置することであった。それは学区の縛りを受けず京都全域から生徒を募集できるアドバンテージを意味している。そのことを理解するためには、多少複雑な京都独特の入試制度について説明を挟む必要があるだろう。

1985年の入試制度改革以降、京都の全日制普通科高校には、一つの学校内にⅠ類(標準コース)、Ⅱ類(学力伸長コース)という類型が設けられ、類型ごとに選抜が行われていた。Ⅰ・Ⅱ類ともに府内を8つに分けた通学圏内での総合選抜(各校が単独で合否判定する単独選抜ではなく、合格者を通学圏内の高校に自動的に振り分けることで学校間の学力格差をなくす制度。Ⅱ類に関しては2003年より単独選抜に移行)となる。ポイントはⅢ類(体育・芸術系などの個性伸長コース)および専門学科(商業科・工業科など)はそうした縛りを受けないことだ。

そこで考えられたのが、普通教育をより高度に拡充させた普通科系の専門学科を設置することだ。これにより、

通常の普通科と比較してカリキュラムに独自性が加えられるうえ、通学圏に縛られず単独選抜で生徒を募集することが可能となる。有り体にいえば難関大学を志望する生徒を府内全域から集めようという発想だ。そのためエリート校化を危惧する批判も少なくないが、これまではない行政の動きに多くの市民から歓迎の声があがった。

課題は新学科の中身だ。当時、市教委で改革の陣頭指揮をとっていた荒瀬校長らに課せられたテーマは、大学進学率の向上という市民からの要求に応えることと同時に、「高校の役割とは大学に受からせることだけなのか」という疑問にも答えをだすことであった。同校長は言う。

「大学に受かるだけの力ではない力とは何かと考えた時、それは、大学入学後、自ら学ぶ姿勢であり、将来どのように生きていくかしっかりと考えられる力だろうと。その力をつけるためにどうすべきかを考え抜いた」

その答えが大学での高度な専門研究に向けた探究能力を養う人間探究科・自然探究科であり、前述の探究基礎という科目であったのだ。

### 「二兎を追う」「自立する18歳を育てる」

「大学に合格する力」と「将来を生き抜く力」というように、同校では物事を二つの側面からアプローチするよう生徒に奨励している。これは荒瀬校長の口癖でもある「二兎を追う」という言葉に表されている。二兎とは「知識修得型の学習と課題探究型の学習」であり、「受験英語力と英会話能力」であり、また「部活動と勉強」や「よく学びよく遊ぶ」ということである。敢えて二つ以上の目標に取り組むことで視野が広がり、より高い成果があがるという考え方だ。これらは表裏をなすものでどちらかを選ぶものではないとも言う。例えば「知識修得型の学習と課題探究型の学習」。知識があるから課題に取り組むことができるわけだし、課題に取り組むうちに新しい知識が習得できる。二つは互いに高め合う相乗作用を持っている。そのため同校の生徒は大変忙しい。部活動や行事が盛んである一方、受験指導も徹底している。



探究基礎の化学ゼミのひとコマ

生徒に馴染みのフレーズといえば「自立する18歳を育てる」という同校のスローガンもそうだろう。探究基礎の運営には「探究基礎委員会」、海外研修旅行には「海外研修旅行委員会」という具合に、多くの取組みに生徒が主体的に携わっているのもその表れといえる。

### 探究科目の発展

こうして始まった探究基礎も、当初から現在のように完成されたものではなかった。初期は文献研究を主体とした文系寄りのテーマが中心であったという。今のような高度な研究や実験が可能になったのは2002年にスーパーサイエンスハイスクール(理数系教育の研究開発校)の第1期指定校に選ばれてからだ(2005年に5年間の指定延長)。これにより大幅な予算がつき、高速液体イオンクロマトグラフィなどの高価な機器を購入したり、大学院生によるティーチングアシスタントをつけたりすることが可能になった。

2003年度から高校における「総合的な学習の時間」が実施されるのに伴い、普通科版の探究科目「総合探究」がスタートした。前述のように、京都の公立高校にはI類、II類などの入試区分があり堀川高校も例外ではない。難関の入試を経て入学してきた人間探究科・自然探究科の生徒のほかに、普通科I類、II類の生徒もいる(図表1)。「堀川という集合体は3つの学校からなる」と評されることもあるくらい入学時の学力レベルは異なる。そうしたなか総合探究は、普通科の生徒に対しても人間探究科・自然探究科の生徒同様、「知りたい」という気持ちを刺激するために開始されたものだ。カリキュラムや目標設定は異なるものの基本的な方向性は探究基礎と変わらない。

「それまでの学習状況や学力の定着度に差があることは事実だが、こと学ぶ意識や高みを目指す姿勢、力をつける過程に入学時の偏差値などまったく関係ない」と荒瀬校長は力説する。手間のかかる2種類の科目(探究基礎・総合探究)を並列して行うことは効率が悪いし、進学実績だけを考えるなら人間探究科・自然探究科に力を集中したくもなろう。しかし「総合探究を導入することに何の躊躇もなかった」と語るところに、同校の理想を貫く姿勢が表れている。もっとも、総合探究における優秀な研究成果を武器にAO入試や指定校推薦で難関大学に進む

生徒も少なくない。荒瀬校長は語る。

「手前味噌だが、うちの生徒をとった大学は絶対に得だと思ふ。勉強することの意義を知っているからだ。ある普通科の卒業生は進学先で『なぜ、大学生は勉強しないんだ』と驚いていた」

また、ある大学の教授から「堀川出身の生徒はすぐ分かる。実験に対する姿勢や動きが違う」と言われたことがあるそうだ。この言葉は本当にうれしかったという。

### 成果と課題、今後の方向性

人間探究科・自然探究科が新設され10年が経った。進学実績は新生堀川1期生が卒業した年にあたる2002年以降、現在まで高い数値を維持している(図表2)。

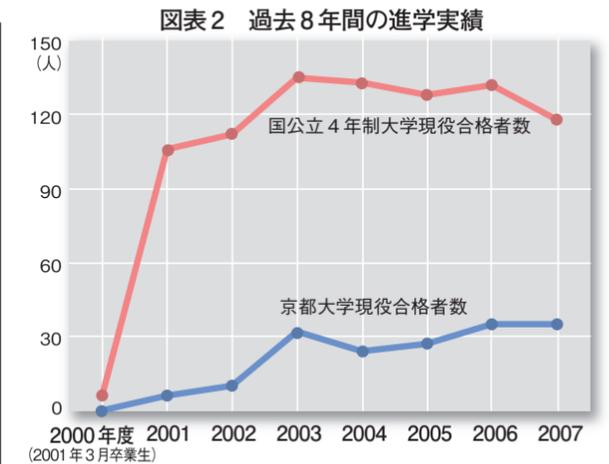
さらに高い数字を期待する声もあるが、荒瀬校長は冷静だ。「これ以上数字を伸ばそうとするのであればやり方を変える必要がある。それは徹底して進学指導にシフトすること。大学合格こそすべてという意識改革から始め、生徒をその気にさせる必要がある。でも、それで合格させたところでその子は長続きするだろうか」

そうした考えと逆行する形で、同校は新たな課題を抱えている。「探究科の試験に落ちたが、どうしても探究科目を学びたいから普通科II類の試験を受けて堀川に来た」という生徒がいる一方、「大学に合格しさえすればいい」という生徒も増えていることだ。進学実績がクローズアップされるなか、仕方のないことだろう。だが荒瀬校長は、そうした生徒を否定するものではないと前置きしたうえで、それは堀川高校の方向性ではないと言う。

「繰り返すが、大学合格は一つのステップであり大切なのはその後。そのために自ら学ぶ姿勢を高校時代につけてほしい。そのことを今後もアピールしていきたい」

同校長はまた、成功に甘んじることの危険性も感じている。「凡人の集まりである私たちが、ここまで何とかうまくこられたのは、方向性をしっかりとち、点検しながらやってきたから。よく失敗体験が大切だというのが、それは失敗を乗り越えて成長するからだ。成功体験も同じ。そこを乗り越えてこそ意味を持つ」

「ゴールに行く道は無数にあるのに、この道でないとダメだと思ひ始めるとゴールをも見失う可能性がある。ゴールよりもやり方に意識が集中するからだ。『去年やっ



ていたから』『これがうちのやり方だから』と思ひ始めると何のためのやり方なのかを忘れてしまう。ゴールや方向性を見失った集団は烏合の衆。組織とは呼べない」

### 高校現場から大学への提言

最後に、生徒を送り出す立場から見た大学への要望や提言について伺った。

「あえて言うなら、アドミッションポリシーの具体化。こういう学生を育てたいという大学の考え方が、はっきりと伝わってこない気がする。どの大学も似ているのは当然かもしれないが、漠然としたイメージではなく、もう少し具体的に『こういうことを考える学生を育てる』『4年間でこんな力をつける』というところを明確に打ち出して頂きたい」

これに付け加えるように次のように語る。

「単なる学力検査だけでは本当に大事な力を見落とすこともある。それよりも、どういう学びをしてきたかという学習歴を見る試験・検査をして欲しい。例えば難関国立大学などでも本物のAO入試を真剣に実施して欲しいですね。単なる学力検査とは別の尺度があってもいいと思います」

高校生向けの公開講座や出前授業なども大変有用だと話す。実際、ある大学の特別プログラムに参加し、そのまま進学した生徒や、逆に、これは自分のしたいことではないということに気付き別の大学を選んだ生徒もいるという。大学の学び、授業はどういうものか分かった状態で進学することはとても大切なことと荒瀬校長は語る。

(堀水潤一 ライター)